

父乎。今報汝仇也。汝起而敵。長太夫驕然視之。將起不得起。本平進跨長太夫上。學被刺之。絕喉登之。本平乃解穢歲之怨。悠然隱跡而亡。不知所之。兄宗助聞之。慚悔。明且自盡。都城端門之外。と其の頭末を漢文に記載して齋藩中の記録に備へたり。蓋金澤町會所安永七戊戌年の留記中に、赤尾本平が人相書を載せたり。其の文に曰く。

赤尾本平人相書

- 一、年齢二拾五歳。
- 一、出生小川直右衛門様家來淺野川川除町に罷在候赤尾丹右衛門與申者に而、先年本組與力堀壘左衛門殿子息、同苗長太夫殿被致殺害相果候者之せがれ。
- 一、中せい、少しひきく中肉。面躰鼻筋通り、色淺黒き方。
- 一、鬢高き方、月代薄き方。
- 一、目常躰。
- 一、齒並揃ひ、唇常躰。
- 一、耳常躰。
- 一、當月十四日夜、明朝白山に參詣仕候旨に而、私方に罷越候節之衣類、上に黒木綿無紋裏千種色之袴を着し、木綿

藍がへし小紋之股引、脚半仕、大小を帯し、背笠持參仕候。帯并に下著等之儀者相知不申候。

右私妻弟赤尾本平人相書并衣類附如此御座候。以上。

戊九月廿七日

十間町大浦屋與三助印

町御奉行所

按ずるに、右安永七年の人相等穿鑿書に、本平が年齢二拾五歳とあれば、父丹右衛門が殺害せられたる明和五年は十五歳の時なり。河合氏が良民言行録には、父が横死を安永四年となし。本平時年十三とすれど、復讐の年曆をば、天明七年となし。此年距丹右衛門之死已十三年の忌辰とし、さてその歳齡をかぞふるに即ち二十五歳なり。さればその事實は齟齬せず。父横死の時十五歳なるを十三と載せたるは非なり。但年曆は如何なる事にて甚だ誤りけん。是彼復讐の安永七年より遙におくれて撰述せし故なるべし。予が父良卿の話に曰く、本多氏の家士鈴木權八は、兒龍と號し、享和・文化中の人にて刀劍の鑑定に長じ、壯年の頃は武藝に鍛鍊せるよし。此の人の直談に曰く、若年の頃赤尾本平と甚だ親しく懇友なりし故に、復讐の密事も兼々熟談した

り。敵なる堀長太夫が居宅は新坂の高なりしが、復讐の曉天權八も本平の助太刀をせんと、竊に新坂に至るといへども、本平既に本懐を遂げたり。依つて金澤町端まで見送りけるに、町端茶屋にて本平助力の恩を謝し、彼の本懐を遂げたる血刀をば權八に譲る。權八は吾が帯する刀を脱し本平に送りたり。彼の刀は清光の作二尺五寸許の長刀也。權八既に七十歳に及ぶといへども、平常此の刀を帯し、予が父に頭末をば語りて、即ち刀身を見せたりとぞ。

○御坊町

新坂の高にて慶恩寺といふ眞宗道場あり。此の道場をば、俗に御坊慶恩寺と呼べり。故に此の町名を御坊の町と稱せしかど、今は二十人町とす。但し世人は今も尙御坊の町と呼べりとぞ。

○御坊慶恩寺

東流眞宗也。明細帳に云ふ。當寺開基慶心坊也。慶心は大和國小山出生にて壯年の頃、出家得度して本願寺第八世蓮如上人兼禪法主の弟子と成り、延寶二年三月加州金澤御堂建立に付、右堂宇守護の爲め本願寺より差向に相成り下向

仕る處、男女老若歸依のもの少からず。依つて金澤木新保町に自坊を造營し、爰に居住し、其後犀川堅河原町に移轉しける處、萬治元年に寺屋敷藩の用地に召上られ、小立野二十人町なる現今の寺地へ移轉す。とあり。按ずるに、延徳二年に金澤御堂の守護と成るとあるもの、是尾山城地にありし本源寺金澤御堂の御堂番に差下したるものなるべし。犀川堅河原町は今云ふ堅町也。此の地へ移轉せし年號は詳かならず。又今此の寺をば、俗に御坊慶恩寺と呼べるものは、同じ小立野に法華宗經王寺あり。經王寺と慶恩寺と其の唱へ似て混ぜし故に經王寺をば、法華經王寺と呼び、此の慶恩寺をば、御坊慶恩寺と呼べりとぞ。

○法隆山眞行寺

曹洞宗也。山號初めは安禪山といへり。故に三箇屋版六用集には、安禪山眞行寺と記載す。貞享二年由來書に云ふ。寛永八年本多安房利常卿へ申上、金澤百姓町に而寺屋敷拜領、大乘寺先住謙室和尚建立之處、萬治二年御用地に被召上、小立野に而替地被下。開基且那安房家來後井雅樂助造立仕。とあり。按ずるに、元和二年本多安房守家士高名書